日本亡命前における梁啓超の日本認識

盧　守助

はじめに

1860 年代、日中両国はほぼ同時に「明治維新」と「洋務運動」と称される近代化の変革を行った。その結果日本は世界の強国となったが、中国の洋務運動は失敗をもって終わりを告げた。日清戦争における日本の勝利はその象徴の一つである。この点について、梁啓超は「我が国四千年の大夢を覚醒するのは実に日清戦争に敗れて台湾を割き、二百兆を償ったことに始まる」としている[1]。これは当時の中国人に共通の観念であった。この戦争は多年にわたり中国人の記憶に生々しいものとなった。李沢厚は、日清戦争こそ、中国が近代化に入った転換点であると考えている[2]。日清戦争の敗北は「公車上書」運動を誘発し、また、康有為、梁啓超を指導者とする維新派が指導した「戊戌変法」の誘因となった[3]。「公車上書」のスローガンは「講和を拒む」、「都を移す」、「変革を行う」であり、その趣旨は変革を行うことにあった。日本への抵抗は「公車上書」の誘因であったが、数年後の戊戌変法において、康有為が光緒帝に提出した変革策のおもな内容は、日本に倣って変法を行うことであった。この点について、康有為は「強敵を師としても差し支えない」と述べている[4]。つまり、歴史上ずっと中国人に軽視されてきた日本の役割は、中国の生徒から一転して中国の師に変化したのである。これは当時の中国知識人と政治家が日本に対する認識を著しく変化させたことを示している。

日本の明治維新の成功と日清戦争の勝利は、西洋に倣って成功を収めた模範的な事例を中国に見せることとなった。西洋文明は中国の探し求める目標であったが、中国の維新派の指導者である康有為は、「我が国の変法は、日本を鑑にすれば、一切すでに足りる」と述べている[5]。康有為は日本研究の先駆者の一人であり、1886 年にはやくも日本の明治維新を研究し始めた[6]。日清戦争後西洋の書籍の日本語訳を大量に中国に伝えた日本は、中国の維新変法思想の源となった。したがって、中国の維新変法運動は最初から日本の影響を受けたと言える[7]。康有為の門下生であり追随者でもあった梁啓超の変法思想は、とりわけ戊戌変法期においてはおもに康有為の思想を根拠としている。康有為と同様に、彼も熱心に日本に倣うことを唱道した。日本に関する彼の文章には、「記東俠」(1897 年 9 月)、「『日本国誌』後序」(1897 年 3 月)、「読『日本書目誌』後」(1897 年 9 月)などがある[8]。ほかにも、変法を主張する論説において、日本に言及した箇所は数多い。本論文は、この時期梁啓超がいかに日本を認識したのかについて、検討を行う。

1. 日清戦争前の中国人の日本観概況

明治維新を通じて、日本は世界の強国となったが、それに対して、中国の洋務運動は失敗した。この結果について、実藤恵秀は「中国は近代文化をとりいれようとさえおもえば、日本よりもはるかに便宜が多かったにもかかわらず、これに無関心であった。日本では中国にくらべて悪条件にもかかわらず、はやくから熱心にこれをもとめたので、したがって近代化することも中国よりはやかった」と指摘している[9]。

たしかに、歴史、文化、国土、資源、人口から言えば、中国は日本に対して優位を占めていた。にもかかわらず、このような結果になったのは、中国人が西洋の文明を拒んだからであり、その原因は中国人がそれまで長い間「華夷」観念を持っていたことにあった。「中国」という言葉が示すように、中国は世界の中心、文化の本源と考えられていた。中国を「上国」といい、中国の朝廷は「天朝」と呼ばれた。アヘン戦争後の 1842 年、「南京条約」が結ばれたが、その一条には英清両国は互いに対等の礼を使うべく、夷狄、野蛮人と称すべからざることとされている。1856 年、アロー号事件に端を発したイギリスとフランス連合軍との第二次アヘン戦争に敗れた中国は、1858 年に「天津条約」を結んだが、その一条にも、また、欧州人を蛮夷と称すべからざることとされている。

中国人に根強い「華夷」観は、中国の近代化を遅らせる根本的な原因の一つであった。中国は西洋列強から大きな衝撃を受けたため、西洋の科学技術に倣うことを重要な課題としたが、その目的は夷を制することであった。しかし、洋務派の官僚を含めて、多くの知識人は、「西学中国起源説」（西学の起源は中国にあり、機器の起源も中国にある）に固執していた[10]。これは華夷観の別の表現形態であった。これについて、イギリスに留学した経験のある厳復は「今日の夷狄は古代の夷狄ではない」と述べ[11]、中国人が旧来の華夷観を変えることを主張している。同じように、維新派の指導者である康有為も中国人の夜郎自大に批判を加えた。彼は、「我々は旧来、外界との往来を絶ち、夜郎自大にして、政治的にも偏見があり、自ら中国が世界の中心であると考えている。外界には比べる者がなく、その場限りの安楽をむさぼってきたために、国勢を衰微させてきた。しかし、世界の国々は共存している以上、他国を夷と称してはいけない」と述べている[12]。中国人は、中国に大きな衝撃を与えた西洋列強を夷と考え、隣国日本に至っては、さらに軽視していたのである。ところで、明治維新と洋務運動はほぼ同時に行われたが、近代化において、日本は中国より進んでいた。実藤恵秀は次頁の表で両国のちがいを表示している。

この表によると、日本は 1874 年の台湾出兵の前に、明治維新の成果を得、著しく変わったことを示している。しかし、中国人は台湾出兵後にようやく日本で行われている明治維新に関心を寄せ始めた。1874 年 12 月 10 日、李鴻章は皇帝に進呈した上奏文で、明治維新について次のように述べている。「日本は近年、旧制を変えたが、庶民は認めようとしなかった。とはいえ、最初に小さい騒動が生じたものの、時と共に、平安無事を得た。だが、衣冠や暦法の変革はつねに有識者に批判された。しかし、西洋の兵法に学び、西洋の技術に倣って、鉄道と汽車

類似事項	日　本 事　件	年	中　国 事　件	年	その差
外国語学校	洋学所	1855	同文館	1862	7
汽船買い入れ	咸海丸	1857	火輪	1862	5
留学	オランダ留学	1862	アメリカ留学	1872	10
工場	横須賀造船所	1864	西洋砲廠	1864	0
表音文字運動	『漢字御廃止之儀』	1866	『一目瞭然初階』	1892	26
雑誌	『西洋雑誌』	1867	『時務報』	1896	29
近代化の号令	五箇条の御誓文	1868	科挙廃止の詔	1905	37
新聞	『中外新聞』	1868	『昭文日報』	1873	5
電信	東京・横浜間	1869	上海・香港間	1871	2
貨幣制度	新貨幣制度	1871	新貨幣制度	1935	64
頭髪	散髪勝手たるべし	1871	自由剪髪	1911	40
汽車	東京・横浜間	1872	上海・呉淞間	1876	4
新暦	太陽暦	1873	太陽暦	1912	39
国民運動	民選議院設立建議	1874	公車上書	1895	21
国立大学	東京大学	1877	京師大学堂	1902	25
立憲の予告	国会設立の詔	1881	立憲予備上諭	1906	25
憲法発布	大日本帝国憲法	1889	中華民国憲法	1947	58

実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版、1981 年）22 頁

を作り、電報を設け、鉱物を採掘し、自ら銀貨を鋳造したことは、国家の経済と人民の生活に益があったといえよう。日本は大勢の学生を西洋諸国に派遣して、科学技術を習わせている。その勢いは日々広がっており、その志は遠大である。故に、あえてアジアで雄を称え、中国を軽視して台湾を侵犯したのである」[13]。しかし、当時の中国官僚の多くには大国観念と傲慢な意識が根強かったため、心底では日本を軽視しており、とりわけ、日本人が衣冠と暦法を変えたことについて皮肉を述べた。光緒 17、18 年（1891－92 年）になっても、日本に駐在し、公使館で働いていた鄭孝胥は明治維新に納得できず、日本の西洋模倣に対して、「外観は良いが、国事はますます悪くなってきた」と述べ[14]、日本で時折起こった内乱に対して、「神さまがこれをさせ、西洋に倣う人を戒める」と評した[15]。

また、洋務運動時期に、日本を研究する旅行記、文集、日記が続々と著されたが、適切な時に刊行されなかった[16]。例えば、黄遵憲の『日本国誌』は 1887 年（光緒 13 年）に脱稿したにもかかわらず、1895 年（光緒 21 年）にようやく羊城富文斎によって刊行された。1897 年、梁

啓超は『日本国誌』のために記した「後序」に次のように述べている。「中国人はあまりにも日本を知らない。黄子公度（黄遵憲）は『日本国誌』を著し、私はそれを読んで黄子（黄遵憲）に賛嘆した。日本を知り、日本が強くなった原因を現在理解できたのはすべて黄子（黄遵憲）によっている。しかし、また黄子を責めて言いたい。今、中国を知り、中国が弱い原因を知ったのは、黄子がこの著作を書き上げた十年後である。彼が謙遜してこの著作を刊行しなかったため、中国人は、あまりにも日本を知らず、戒めず、用心せず、心配せず、怖れなかった。それ故、今日のようになったのである」と[17]。たしかに、梁啓超が述べているように、日清戦争前中国人は、日本について熱心に、かつ深く理解しようとはしていなかったのである。

2. 戊戌変法と明治維新

日清戦争の敗北は中国人に大打撃を与え、また恥辱を感じさせた。これについて、梁啓超自身も詩で自己の悲憤の念を表している。「悵飲且浩歌、血涙忽盈臆。（中略――引用者）江山似旧時、風月惨無色。帝閽呼不聞、高譚復何益」[18]。日清戦争の翌年の 1895 年 4 月 17 日、日本と中国との間の講和条約（「下関条約」）が結ばれた。これは中国に刺激を与えた。同年 5 月 2 日、康有為は北京で会試を受けた各省の挙人 1300 人余りと聯合して、光緒帝に上書し、「講和を拒む」、「都を移す」、「変革を行う」という主張を請願した。これが「公車上書」である。「公車上書」の発起人は康有為であり、彼の門下生であり追随者であった梁啓超は、最初から、積極的にこの運動に参加した。康有為が上奏文を起草した後、梁啓超は同窓麦孟華と共に、その夜直ちにこれを整理し清書した[19]。講和条約がすでに調印されたために、この上奏文は都察院に受け付けられなかったが、康有為と梁啓超を指導者とする維新派は、これを契機に政治の舞台にのぼった。梁啓超は昼夜奔走して、同志と連絡を取り、国事を議論している[20]。

梁啓超は「戊戌変政記」で、「公車上書」を清朝二百年来未曾有の壮挙であると称し、これにより中国の知識人が次第に世界における全体の情勢を知ることとなったと述べている[21]。しかし、この壮挙の原因は日清戦争の敗北であり、中国人はこれをこの上もない恥辱と見なした。康有為は、日本人が中国を侵犯したことによって、領地を割譲し賠償金を支払うまでに至ったという事実は、清朝二百年来未曾有の恥辱であり、中国人は、ひどく悲しんでいると述べ[22]、また傷は深く痛みも激しい災いを被ったのだから、自らを励ますべきであるとしている[23]。日本に対する惨敗は中国人を天朝上国の夢から覚醒させ、また中国人の対日理解を大きく変化させた。湖広総督張之洞は、日本の勝因を明治維新に帰結し、「勧学篇」で、次のように述べている。「日本は小国でありながら、なぜ急速に興ったのか。伊藤（博文――引用者）、榎本（武揚――引用者）、陸奥（宗光――引用者）らは、みな 20 年前に西洋に留学した学生である。彼らは日本が西洋諸国に脅かされたことに痛恨したが故に、門人を率い、それぞれフランス、イギリスなどに行き、政治や工商、また海軍と陸軍の兵法を学んだ。これらの人々は学業を終え、帰国し、大臣に登用された。その結果、日本は政事が一変してアジアの強国となった」[24]。康

有為も同じように考えていた。彼は「公車上書」で、「日本はただの小さい『島夷』であるにも関わらず、変法によってわが琉球を滅亡に至らせ、わが大国を侵犯することができた。我々にとってこれは一つの戒めである」と述べている[25]。彼はまた他の上奏文で、日本は「蕞爾三島」であり、土地や人民は中国の十分の一にも満たないが、明治維新によって、日に日に強くなり、わが琉球を滅亡させ、遼東半島と台湾を割くことができたと記している[26]。さらに 1898 年 4 月 10 日光緒帝に進呈した『日本変政考』で、詳しく変法の主張を記し、日本に学ぶべきであると述べている[27]。同書の「序」の冒頭で、康有為は、世界中の国々はそれぞれ異なっており、大国もあれば、小国もある、強国もあれば、弱国もある、しかし、今日は競争の時代であるので、国が大きくならなければ小さくなる、強くならなければ弱くなる、「弱国から強国になった点に関して言えば日本にまさるものはない」と述べている[28]。多くの政論と上奏文の中で、康有為は「二十余年」という言葉を用い、日本が変法により強くなった速さを強調した。彼は、「西洋諸国が五百年を経て得たものを、日本は二十余年でこれをなしえた。その成功の速さは、世界でかつてないことである」と述べている[29]。さらに、変法の効果を強調するため、彼は変法を行う前の日本の国勢が極めて衰微していたことを指摘し、次のように述べている。「日本は二百五十年の封建事態を受け継いで、極めて衰微していた。（中略――引用者）しかし、ついに人材を起用し、心を一つにし、努力して維新を行い、二十年も経ないうちに富強を果たして、欧米の大国に匹敵することができた」[30]。そしてまた、「日本のような小さい国でさえ変革によって、急速に強国になれたのは、変法の効果ではなかろうか」とも述べて、強国となった根本的な要因は変法であったとしている[31]。康有為は、中国を救うためには、変法が必要であり、変法するには、西洋に学ばなければならない、日本が西洋に倣って成果を得たからには、中国人は昨日の敵、日本に倣うべきである、「中国の土地と人民は、日本の十倍であり」[32]、「日本の変法の成功を採用し、そのあやまりを捨て」れば、「日本の倍の成果をあげることができる」と述べている[33]。康有為は、「我が国の変法は、日本を鑑にすれば、一切すでに足りる」という結論を出した[34]。

『日本変政考』は、康有為が明治維新の事例をまとめて編纂したものであり、日本における変法の経験を中国で採用することがその目的であった。指原安三『明治政史』（東京富山房、明治 25－26 年）、坪谷善四郎『明治歴史』（博文館、明治 26 年）、木村芥舟『三十年史』（交詢社、明治 25 年）などは、康有為が 1898 年に『日本変政考』を著した際の参考文献であった[35]。また、『日本変政考』の中の少なくない彼の所見は、明らかに黄遵憲の『日本国誌』から写したものであった。例えば、巻一紙幣、巻三官禄、巻五内務省、大蔵省官制改革、巻六元老院などである。1898 年 6 月 11 日、光緒帝は詔勅を発して、変法を行った。これがのちに言われる「戊戌変法」である。光緒帝が頒布した「詔定国是」の内容は、官制、財政、憲法、海陸軍、農工商鉱などを含んでおり、大部分は『日本変政考』を根拠としている。したがって、戊戌変法は日本を手本とした変革と言える。

3. 梁啓超の日本認識

康有為の門下生であり追随者でもあった梁啓超は、自己の思想について、次のように述べている。「私の学問は、すべて南海（康有為）から受けた。（中略――引用者）私が南海の門下生であることは、国の人々によく知られている」[36]。1890 年から 1895 年にかけて、彼は、康有為が広州で創設した万木草堂で学んでおり、多くの知識を康有為から得た。康有為の『日本変政記』と『日本書目誌』は彼に影響を与えた[37]。康有為が万木草堂で講義をした科目の一つが「万国政治沿革得失」であり、『日本変政記』はその内容をなすものであった[38]。康有為が編纂した『日本書目誌』は光緒 24 年（1898 年）春に上海大同訳書局から刊行された[39]。本書は明治 20 年（1887 年）頃の日本の書物 7100 冊を収録した目録であり、生理、理学、宗教、図史、政治、法律、農業、工業、商業、教育、文学、文字語言、美術、小説、兵書の十五門に分かれている。「政治門」には、「国家政治学」26 タイトル、「政体論」6 タイトル、「議院書」40 タイトル、「歳計書」6 タイトル、「政治雑書」51 タイトル、「行政学」27 タイトル、「警察書」11 タイトル、「監獄法書」3 タイトル、「財政学」34 タイトル、「社会学」21 タイトル、「風俗書」30 タイトル、「経済学」59 タイトル、「横文経済学」5 タイトル、「移住殖民書」8 タイトル、「統計学」20 タイトル、「専売特許書」3 タイトル、「家政学」37 タイトルが含まれている[40]。これらの書物を康有為が全部読むことは不可能であり、一部の書物は単に書名を記しているだけであると考えられる。しかし、各門ごとに、康有為が提要を記していることは、彼が少なくとも一部分を読んだことがあったと考えられる。1897 年 11 月 15 日、梁啓超は『時務報』第 45 冊に「読『日本書目誌』後」を掲載して、日本書籍を訳する益を宣伝した。『日本変政記』と『日本書目誌』は梁啓超が日本について得た知識の源の一つであったと言える。この時期の梁啓超の日本認識がどのようなものであったのかについて、次に分析する。

(1) 華夷観の転換

1898 年 9 月伊藤博文は中国を訪れた。9 月 18 日午後、康有為は駐清国日本公使館に伊藤博文を訪ねた。康有為は、まず維新派と光緒帝が伊藤に大きな期待をかけていることを伝えた。彼は、「侯爵が我が国を訪問したのは、ちょうど我が国が鋭意変法を行う時期に当たっている。我が国の志士は、侯爵が我が国に教えてくれること、そして東方の時局を維持することに大きな期待をかけている」、「わが皇帝は鋭意変法を図っており、貴国が我が国と同洲、同種、同文であることに、特に親しみを感じており、日本に見倣おうと考えている。庶民たちも同意見を持っている。それ故、どうかご教示をお願いしたい」述べた。伊藤は「貴国が変法したいと考えているならば、まず夜郎自大の陋習を除くべきである。蓋し世界中どんな人種であろうと、みな地上に生きている。どうして自ら尊大になり、他の人を蔑視して、また夷と見なすことができようか」と答えた。これに対して、康有為は「四、五年前、たしかに我が国の多くの人はそのような考え方を持っていた。しかし日清戦争後、数千年の大夢を貴国に覚まされた故に、もはやそうした考えは持っていない」と述べている[41]。

『康南海自編年譜』で康有為はこの面談に言及しているが、詳しくは記してはいない[42]。これは伊藤が康有為や梁啓超の指導した変革に賛同しておらず、政治的見解が異なっていたためであるかもしれない。ただし、注目すべきことは、その面談での伊藤の忠告は「華夷」観を変えなければならないとしている。たしかに夜郎自大の「華夷」観は、中国の近代化を遅らせた原因の一つであった。日本が急速に興ったこと、そして日清戦争での中国の敗北は、中国の知識人及び政治家の重大な関心事となったが、「華夷」観をかたく抱く人は依然として少なくなかった。康有為と同様に、梁啓超は、中国を進歩させるためには、まずこの頑迷固陋な「華夷」観を打ち破らなければならないと考えていた。1897 年刊行の同窓徐勤の『春秋中国彝狄弁』の序文で、梁啓超は「彝狄の行為があれば、『中国』であっても彝狄である。彝狄の行為がなければ、彝狄であってもみやびやかな君子である。攘夷をするのは、必ず彝狄の行為があるものを排斥する」ことであるとしており[43]、万国競争の時代に、「中国」と称し、「彝狄」の行為がある国は国際社会の仲間入りはできないと述べている。「論中国宜講求法律之学」で、梁啓超は「我が国は四億の公理が分からず権限を重視しない人々の集まりである。西洋諸国と共存しているということは、たとえ守りが堅固であっても、攻めの兵器の方が鋭く、食糧が豊富であっても猛虎が猟師に会って生き残る事ができないことと同じである。このような国勢、このような政体、このような人心と風俗にも関わらず、大声で『中国』自称したのだから、西洋人は我々を三等の国と見なしたのであり、世界中がこのような人々を受け入れることはない」と述べている[44]。彼は、「中国」と「夷狄」との関係は一定不変であるわけではなく、変革を行わなければ、中国は新しい「夷狄」となると考えた。梁啓超は、中国と日本を比べて、近代において中日両国は同様に西洋の侵略の危機に直面していたにもかかわらず、中国はアヘン戦争から一再ならず辱めを受けてきた。これに対して、日本は明治維新の成功により、区々たる三島ではあるが、もはや「東夷」ではなく「西洋諸国、例えばロシア、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ等をみな恐れさせ、蔑視する勇気をなくさせた豪傑の国である」と評している[45]。彼は「西洋における全盛の国でアメリカに勝る国はなく、アジアにおける新興の国で日本に勝る国はない」と日本を讃えた[46]。梁啓超は、日本は斬新な国であり、中国が日本に倣って弱国から強国になることを願っていたのである。

(2) 日本語への認識

前述したように、康有為は明治維新の成功について論述する際に、しばしば「二十年間」あるいは「三十年間」という言葉を用い、日本が弱国から強国になった「速さ」を強調した。日本の勃興について梁啓超も、同じように「日本は昔、猫の額ほどの国であったが、今日では豪傑の国である。三十年の内に、弱国から強国になった。まず琉球を奪い、さらに台湾を割いた」と述べている[47]。梁啓超は、今日の世界で、変法により強国になった国はロシアと日本であると考えていた[48]。ロシアについて、梁啓超は「ピョートル大帝が西洋諸国に遊歴し、工芸を学び、帰国後変革を行った。その後の皇帝らは彼の方略を受け継いで、国勢は日増しに強盛にな

り、数万里の領土を開拓した」と評している[49]。日本とロシアは中国のモデルであった。しかし、ロシアは中国からかなり遠いため、ロシアに倣っても効果はさほど期待できず、さらにロシアと中国の文字が異なる点は、ロシアに倣う大きな制約となった。ロシアとは異なり、西洋の模倣によって著しい成果を得た日本は、中国の近隣であり、かつ両国の文字は同文であるので、倣うのは易しかった。梁啓超によれば、中国の狙いは西洋に倣うことであり、そのためには、西洋の言語習得が必須である、しかし、中国で西洋の諸言語を習得している人は少なく、西洋の言語を理解した後に西洋の書籍を読むとすると、それは百年後のことになるであろう、自強のためには、まず西洋の書籍を翻訳しなければならない、しかし「西洋の言語は、少なくとも七年をかけて、ようやく習得できる」[50]、しかし、中国にとって変法は目前の急務であり、できるだけはやく西洋の各種の学説を理解しなければ、「変法はできず、国も強くなれない」と述べている[51]。梁啓超は、日本の成功の要因は西洋の書籍を大量に翻訳したことであると帰結した。彼は「日本では、杉田翼等が、まずオランダの書籍を日本語に訳した。尼虚曼はひとりでアメリカに行き、帰国後大いに西洋の学問を説いた。これまで日本の出版社はおおよそ役に立つ西洋の書籍をすべて日本語に訳した。日本の変法は西洋の強盛の本源を理解したので、成功を得、ついに強国になった」と述べている[52]。

梁啓超は、日本人が西洋の各種の書籍を日本語に訳し、日本の変法に大きな効果をもたらしたからには、中国人はその成果を直接利用すべであると考えた。彼は「日本人はほぼ西洋の各分野における重要な書籍を翻訳した。我々はその成果を活用する、これはちょうど西洋人を牛とし、日本人を農夫とし、そして我々が座して彼らの成果を食べるようなものである。千万金を費やすことなく、すべての重要な書籍を集めることができる」としている[53]。梁啓超がこのように述べたのは、日中両国は同文であり、邦訳を利用することが西洋模倣の近道であると考えたからである。彼は、明敏な人なら数ヶ月で日本語を習得でき、数年のうちに日本人が訳した西洋の各分野における重要な書籍をすべて中国語に翻訳し、中国の知識人と政治家はみな西洋の学問の研究が可能となり、そうなれば「日本は二十年経って大成功を得たが、我が国民と国土は日本の十倍あり、十年もかからずに成功するであろう」と述べている[54]。梁啓超は中国人が明治以降に日本で訳された書籍を読み、昔の敵の経験を参考にして、中国の国土を守り、他国の侵略に抵抗することを願っていたのである[55]。

このように記されている「読『日本書目誌』後」（1897 年 9 月）発表の一ヶ月後の 10 月、梁啓超は「大同訳書局叙例」を記して、大同書局を創設する趣旨を述べている。そこでは再び西洋の書籍を訳することの重要性を強調した。彼は、「早急に西洋の書籍を訳さなければ、変法は空論になり、国家は何らの変法の効果も得られない」と述べている[56]。当時京師同文館、天津水師学堂、上海製造局などの官営の訳書局があったが、三十年の間に、翻訳された西洋の書籍はわずか 100 種類であった。このような進度の故に、これから三十年が経てたたかだか 200 種類しか翻訳できないであろう。大同訳書局はこうした状況下に創設されたが、梁啓超はその

翻訳について「日本語の書籍を主とし、西洋の書籍を二次的とする。また政治学を優先とし、工芸学を二次的とする」としている[57]。梁啓超が日本語の書籍の翻訳を主要な任務としたのは、日本語を習得する方が易しいという彼の考えが関わっている。「論訳書」で、梁啓超は「日本は我が国と同文の国であり、昔から漢文を使っていた。和文が作られてから平仮名や片仮名が漢文と共に使われたが、それでも漢文はなお 6、7 割を占めている。日本は明治以来鋭意西洋に倣い、重要な西洋書籍をほぼ備える一方、自ら新しく著したものもかなりある。今真に日本語を学び、日本書籍を翻訳すれば、精力を費やすことは甚だ少なく、益を得ること甚だ大きい。日本語に通暁し易しい理由はいくつかある。(1)発音数が少ないことである。(2)発音がみな漢文にあるものばかりで容易である。(3)文法が周密でない。(4)名物や事象はたいてい中国と同じである。(5)漢字が 6、7 割を占めている。故に黄君公度（黄遵憲）は、日本語を学ばずとも日本語に通暁でき、もし記憶力が優れていれば、半年で日本語に通暁できない人はいないと語っている。西洋の言語と比べると、半分の力で倍の成果をあげることができる」と述べている[58]。このように考えたのは梁啓超だけではない。例えば洋務運動の指導者の一人であった張之洞は、康有為や梁啓超と政治的意見を異にし対立していたが、この点についてはまったく同じ意見であった。張之洞は「勧学篇」で「西学は甚だ複雑であり、およそ西学の不切要なものを日本人は削除し適宜改めた」と述べ[59]、また日本語を学ぶことのおもな理由を、「日本語は中国語に近く通暁し易しい」ためであるとしている[60]。こうした考えは、当時の中国指導者の一般的な見解であったのである。梁啓超は日本亡命後も、ずっとこうした考えを持ち続けていた。

(3) 日本に関する論説

日本に関する梁啓超の知識はおもに康有為から獲得したものであった[61]。しかし、康有為と同じように、梁啓超は多くの変法に関わる論説において日本の事例に言及しているが、彼はたんに日本の勃興を賛嘆したに過ぎない[62]。梁啓超が詳しく論じた分野は日本の学校制度と女学（女子教育制度）である。日本の学制について、梁啓超は次のように述べている。「中国において変法を行うためには、まず学校を興さなければならないと今日の有識者は考えている」[63]。当時中国には、同文館や水陸師学堂などがあったが大した効果を果たしていなかった。そのため、梁啓超は日本の教育制度に倣うべきであると考えた。「論師範」において、彼は「よいかな、日本人は学校を興す。明治 8 年日本では広範に大学を創設した。その 3 年前には、まず師範学校を設立する。師範学校は、小学校と同時に設立され、師範学校の卒業生は小学校の教諭となる。小学校の生徒は数年後中学校と大学に進学する。小学校の教諭は中学校と大学の教諭に昇進することができる。故に、師範学校の設立は、各分野の学科の基礎を作っている」と述べている[64]。この文中で、梁啓超は日本の師範学校の教育科目を詳細に記している。それは、(1)修身、(2)教育、(3)国語（日本語を指す――引用者）、(4)漢文、(5)歴史、(6)地理、(7)数学、(8)物理・化学、(9)博物、(10)習字、(11)図画、(12)音楽、(13)体操、(14)西洋言語、(15)農業、(16)商業、(17)工芸の 17 科目である[65]。日本の教育制度を参考に、梁啓超は、まず中国各省の府州

県に小学校と師範学校を設立し、師範学堂の卒業生を小学校の教諭とさせ、その中でも優秀な卒業生を中学校あるいは大学堂の総教諭とするなら、十年のうちにすばらしい人材が至る所に輩出できるであろうと述べている[66]。女子教育の重要性について梁啓超は、次のように述べている。「女子教育が最も盛んな国は最強であり、戦うことなくして、他国を屈服させることができる。それはアメリカである。アメリカに続いて女子教育が盛んな国は、イギリス、フランス、ドイツ、日本である。女子教育が不振ならば、子供は必ず母からの教育を失い、技能と知識を持つ人は少なくなり、無職の人が多くなる。こうした国がまだ存在するのは、幸いである。それはインド、ペルシャ、トルコである」と[67]。梁啓超は日本の女子教育の科目をあげ、師範教育の科目と比べて、農業、商業、西文、工芸などの科目がないことを指摘している。しかし、どのように女子教育を実施するのかという点については、彼はまったく論じていない。梁啓超は日本の成功を幾度も賛美しているが、実際には、日本の成功の根本的な原因をよく理解しておらず、たんに日本が変法したことにその理由を求めたに過ぎなかった。また「日本書目誌」が 7100 種類の日本書籍を納め、「政治門」では、政治に関する書籍は 387 種類を超えているが、梁啓超はこれらを一切利用していない[68]。梁啓超は一貫して日本に倣うことと提唱したが、多くの場合ただ理想を主張しただけであったといえよう。

(4) 梁啓超と幕末志士

日本亡命前の梁啓超は、福沢諭吉、中江兆民、加藤弘之等の思想には触れていないが、幕末の志士をしきりにほめたたえている。梁啓超が 1901 年 12 月に発表した「康南海先生伝」で、万木草堂における康有為の教育主旨を追想して、「彼（康有為――引用者）の教えた主旨は、もっぱら節操に励み、精神を揚げ、広く智恵を求めることである」と述べている[69]。万木草堂は康有為が学術を討論する拠点であっただけでなく、政治団体でもあった。康有為は、学術の宣伝を通じて、彼の政治的理想を実現しようとした。康有為について、宮崎滔天は次のように述べている。「康（有為――引用者）が広東万木草堂の家塾に蟄居して子弟を教育したる時は、彼は宛然たる一個の小ルソーにて有之候。彼が理想として子弟に鼓吹したるは米仏の自由共和の政体にて有之候。彼が尊重して子弟に推読せしめるは中江篤介の漢訳せる『民約論』や『仏国革命史』『米国独立史』乃至は『万国公法』にて有之候。彼が理想の人物は米国の華盛頓にて有之、又時に見識ある吉田松陰を以て自から任じ居申候。彼は其弟子の志気を鼓舞せんがためには態々『日本之変法由遊侠浮浪之義憤考』といふ書物さへ据へ申候。要之当時の康有為は実に支那思想界の革命王として恥しからぬ人物にて有之候」[70]。滔天がふれている『日本之変法由遊侠浮浪之義憤考』は、康有為の長女康同薇が著した『日本変法由遊侠義憤考』である[71]。康有為はこの本のために序言をあらわしているが、そこには自分の弟子が幕末志士の精神を備えることができるようにという願いが込められていた。吉田松陰は、彼が最も高く評価した人物であり、松陰の著書『幽室文稿』は康有為が弟子たちに読ませたものであった[72]。

梁啓超が日本に亡命してまもなく 1898 年 9 月 20 日に品川弥二郎に宛てた手紙において、幕

末の志士、特に吉田松陰に対する尊敬の念を示している。彼は、「私は以前中国にいた時、南海康先生（康有為）の弟子であった。南海はすべての弟子入りした者に『幽室文稿』を授けて、『いささかでも意気消沈するような時に、この本を読むなら、必ず警世の言に勝る』と教えた。私はこの本を読みすでに数年になるが、つねに松陰先生と対面していたようであった。（中略――引用者）私は松陰（吉田松陰――引用者）と東行（高杉晋作――引用者）を敬慕するため、今名前を吉田晋に改めた」と述べている[73]。梁啓超が名前を改めたことは、中国人の批判を招いた[74]。馮自由によれば、日本へ亡命した中国人は日本人の差別を避けるために、そのようにしたのであった。例えば孫文も中山樵を名乗っている。馮自由は、梁啓超が吉田松陰等を敬慕するため、吉田晋と自称したと記している[75]。これは梁啓超が来日前に著した文章と言論からも分かることである。

1895 年、梁啓超は万木草堂を離れ、彼の学生としての生活は終わった[76]。その後、『時務報』の主筆となった時にも、また湖南時務学堂総教諭の任に就いた時にも、幕末の志士について述べ、明治維新の成功はすべて幕末志士によるものであったとしている。「記東侠」（1897 年）で、梁啓超はかつて岡千仞『尊攘記事』と蒲盛重章『偉人伝』を読んだことがあるとしている。彼は、吉田松陰、佐久間象山、青川八郎、牟田尚平、中山忠愛、平野国臣などの志士の名を挙げ、彼らの義挙により、「一人が唱導して、百人が呼応した。一人が犠牲となり、百人が続いた」と述べ、そのようにして、日本を挙げて、男性、女性を問わず、ないし僧侶は、みな維新の志士となり、ようやく維新事業を成功させたと論じている[77]。また 1897 年 11 月梁啓超は湖南省時務学堂の総教諭を担当していた時に、生徒たちの質問に答えて、「日本が強国となったのは、はじめに二、三人の藩士が義憤を持ち、憤りと熱情に満ちて、大衆に呼びかけ、大衆はこれに応じた。これはすべて志士の力であった。中国では、このような人物はいないため、なんともしようがない」と述べている[78]。

康有為が吉田松陰等を敬慕した理由はおもに節操を養うためであるが、梁啓超の場合には、変革の手段からみてのことであった。彼は維新の志士を敬慕することで、中国のすべての人が心を一つにする気風を作り、変革を押し広められるのではないかと願っていた。狄楚青によれば、湖南時務学堂の任に就く直前、梁啓超が同志と変法の方法について議論した際には、梁啓超は、急激な方法でかつ満清政府を打倒することが本位であることを主張していた[79]。湖南時務学堂時期において、梁啓超は譚嗣同と共にひそかに黄宗羲の『明夷待訪録』と王秀楚の『揚州十日記』を数万冊印刷し、あわせて「批評を加えて、秘密裏に頒布して革命思想を宣伝した」[80]。これは、彼が教室で、「民族感情をも憚るところなく語っていたからに他ならなかった」[81]。その後、彼は湖南巡撫陳宝箴に上書して、湖南省の独立を要望した[82]。幕末における志士の事績は、急激な変革を行うという梁啓超の思想の形成を促した。あるいは、梁啓超は急激な変革を行うため、幕末志士の義挙を讃えたとも言える。

おわりに

日清戦争後、日本に倣い、変法を行うことは、康有為、梁啓超を指導者とする維新派のスローガンの一つであった。康有為の『日本変政考』がどのような役割を果たしたかは別にしても、少なくとも彼は明治元年から行われたさまざまの政策と措置を詳しく引用して自己の見解を明らかにしている。しかし、日本に 14 年間滞在した梁啓超は明治維新に関する研究論文を書かなかった。

来日前、梁啓超は明治維新の成功を三つの要因にまとめている。第一は、日本が大量に西洋の書籍を翻訳したこと、第二は、日本が学校制度を整えたこと、第三は、幕末における志士の義挙が維新の成功に決定的な役割を演じたことの 3 点である。来日後、梁啓超は『清代学術概論』で、次のように述べている。「日本で新しい書物が出ると、翻訳者が、ややもすると数人出るというふうで、新思想の輸入は澎湃としておこった。しかし、みないわゆる『梁啓超式』の輸入で、組織もなければ選択もない、本末そなわらず、学派の区別もわからぬありさまであって、ただ多ければよしとしたのである。社会もまたそれを歓迎した」[83]。

しかし、梁啓超が訳した日本人の著作は柴四郎の『佳人之奇遇』と矢野竜渓の『経国美談』だけである。また 1899 年 8 月 6 日梁啓超は東京で高等大同学校を創設したが、在日中に、一度も日本の大学との学術交流はなく[84]、学校制度について論述した文章もない。また、幕末の志士について、梁啓超は亡命初期において言及しているが、のちにはほとんど言及しなかった。たとえば、日本亡命の途中で、彼は「去国行」という詩を書き、自己が西郷隆盛、高山彦九郎、蒲生君平、佐久間象山、吉田松陰等の志士のように、祖国の維新事業に功績を立てたいと述べた[85]。しかし、1903 年後半になると、政治思想の変化につれて、彼は中国人の道徳の程度がなお不十分であるという理由で、幕末の志士の行為が中国に適合しないと考えた[86]。

注

[1] 「戊戌政変記」、『飲氷室合集・専集』之一、中華書局、1989 年、19 頁。

[2] 李沢厚『世紀新夢』安徽文芸出版社、1998 年、122 頁。

[3] 戊戌変法は、清朝末期に康有為、梁啓超らが明治維新に倣って唱えた、憲法制定、国会開設、学制改革などの政策である。1898 年、光緒皇帝が採用し、急激な変革を行おうとしたが、西太后らの守旧派から武力弾圧をうけて失敗し、康、梁は日本に亡命した。

[4] 康有為「日本変政考序」、蒋貴麟主編『康南海先生遺著彙刊』（十）、台湾宏業書局、民国 74 年、2 頁。

[5] 康有為「日本変政考跋」、『康南海先生遺著彙刊』（十）、335 頁。

[6] 康有為は「康南海自編年譜」で、次のように述べている。「（私は――引用者）丙戌年（1886 年）『日本変政記』を著し、日本の変革の事例を集めた。今年に至って、日本の書籍をたくさん入手したので、長女康同薇に訳するよう命じた。これによって、原稿ができた」（「康南海自編年譜」、楊家駱主編「戊戌変法文献彙編」（四）台湾鼎文書局、民国 62 年、136 頁。以下「戊戌変法」と略称）。また彼は「琉球が滅亡させられた際に、日本で商売をしている同郷人が日本の書目を所持していたので、私は購入を頼んだ。それにより、私は日本が鋭意変革を行い、著しい成果を得たことを知った」と記している（「進呈日本明治変政考序」、「戊戌変法」（三）、4 頁）。康有為は実に 1870 年代の末に、日本の書籍を読み、日本の政局に注意を払い始めていたのである。

[7] 「日本変政考序」で、康有為は『日本変政考』を著作した経緯を次のように記している。「乙未年（1895 年）、中国と日本の間の講和条約（「下関条約」――引用者）が結ばれた後、私は広く日本書籍を捜している。私の長女康同薇は日本語が少し分かるので、訳して本を作っており、これまでで三年になる。私はようやく日本変法の子細と順序が分かった。私はこれによって、繁雑な部分を削って簡潔にし、十巻にまとめた」（「日本変政考序」、「康南海先生遺著彙刊」（十）、2 頁）。しかし、中国人による日本書の最初の翻訳は、1899 年（光緒 25 年）のことである。桑原隲蔵『東洋史要』を樊炳清が訳して 4 冊とし、東文学社から出版した。東文学社は、日本語を教えるために、1898 年羅振玉によって上海に開設され、藤田豊八がその教育にあたった。

[8] 『飲氷室文集』第一集、雲南教育出版社、2001 年、125 頁、140 頁、155 頁。以下「文集」と略称。

[9] 実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版、1981 年、22 頁。

[10] その先駆けは羅江荷笠者の『瀛海論』であった。

[11] 厳復「論世変之亟」、石峻主編『中国近代思想史参考資料簡編』北京三聯書店、1957 年、474 頁。

[12] 康有為『日本変政考』巻一、「康南海先生遺著彙刊」（十）、12 頁。

[13] 『李鴻章全集・巻二十四奏稿』、海南出版社、1997 年、263 頁。

[14] 鄭孝胥『鄭孝胥日記』第一冊、中華書局、1993 年、261 頁。

[15] 『鄭孝胥日記』第一冊、311 頁。

[16] これらの著作は陳其元『日本近事記』、李筱圃『日本遊記』、金安清『東倭考』、陳家麟『東槎聞見録』、黄慶澄『東遊日記』、王韜『扶桑遊記』、何如璋『使東述略』、『使東雑詠』、張斯桂『使東詩録』、王之春『日本瑣誌』、姚文棟『日本地理兵要』、『琉球地理誌』、傅雲龍『遊歴日本図経』、顧厚焜『日本新政考』、黄遵憲『日本国誌』、『日本雑事詩』などである。その多くは、王錫祺によって『小方壺輿地叢鈔』に収められ、1893 年までに続々と上海で刊行された。

[17] 梁啓超「『日本国誌』後序」、「文集」第一集、140 頁。

[18] 「与穂卿（夏曾佑）足下書」、丁文江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983 年、32 頁。以下「長編」と略称。

[19] 康有為「康南海自編年譜」、「長編」、38 頁。

[20] 「戊戌変政記」、『飲氷室合集・専集』之一、113 頁。

[21] 同上。

[22] 康有為「上清帝第三書」、『戊戌変法』（二）、166 頁。

[23] 同上論文、『戊戌変法』（二）、167 頁。

[24] 張之洞「勧学篇」、『張之洞全集』（十二）河北人民出版社、1998 年、9737 頁。

[25] 康有為「上清帝第二書」、「戊戌変法」（二）、153 頁。

[26] 康有為「上清帝第四書」、「戊戌変法」（二）、179 頁。

[27] 『日本変政考』は編年体の史書で、明治元年（1868 年）から、明治二十三年（1890 年）にかけて、明治維新後の重要な事件を順に箇条書きしたものであり、明治政府が実施したさまざまな変法措置に重点が置かれている。これをもとに、康有為は「臣有為謹案」の形で、明治維新の利害得失を評論すると同時に、中国が日本にいかに倣うべきかについて、具体的な提案を出している。

[28] 康有為「日本変政考序」、「康南海先生遺著彙刊」（十）、1 頁。

[29] 同上論文、「康南海先生遺著彙刊」（十）、2 頁。

[30] 「日本変政考」巻六、「康南海先生遺著彙刊」（十）、136 頁。これについて、汪栄祖は次のように評論している。「明治維新はやや清朝の洋務運動に遅れたが、日本が二十年で富強を成し遂げたのは、政府と人民が心を一つにしたことだけでなく、実は、日本の二百五十年の封建局面はそれほど悪くなかった。鎖国前に、日本人と西洋文明との接触は百年を経ており、西洋文明はすでに日本人の思惟と生活に影響を与えていた。鎖国した後も、蘭学はなお存在していた。蘭学は幕府の制圧を受けたが、民間人の学者は粘り強く研究し、言語のほか、さまざまな学問を広め、書物を著し続けた。幕末になって、洋学は早くからその知識人に知られた（汪栄祖『従伝統中求変』百花洲文芸出版社、2002 年、163 頁）。康有為の述べた「極めて衰微であった」という表現は、明治維新の成功が極立っていたためであろう。彼は蘭学の存在を知らなかったわけではない。『日本変政考』で、康有為は、「日本では、文化八年（1811 年）、浅草天文台に翻訳局を設立し、特に蘭学者数人を招聘して、もっぱらオランダの書籍を翻訳し始めた。安政三年（1856 年）、さらに翻訳のほかに、オランダの学問を講義した。やがてイギリス、フランス、ドイツ、ロシアの書籍を講義し、次第に化学、物産学、数学などの三項目を講義した。また文久二年（1862 年）、教授津田真一郎、西周助を二年間オランダ留学に派遣した。海外への留学は、この時から始まっており、嘉応（慶応――引用者）二年（1866 年）には、さらに留学生をイギリスへ派遣している。そしてまた、同年オランダ人を物理、化学の教師として招聘し、外国人を教師とすることがその時から始まった」と記している（「日本変政考」巻五、「康南海先生遺著彙刊」（十）、126 頁）。

[31] 康有為「上清帝第四書」、「戊戌変法」（二）、179 頁。

[32] 康有為「日本変政考序」、「康南海先生遺著彙刊」（十）、2 頁。

[33] 同上。明治維新のあやまり（錯戻）はどこにあるのかについて、康有為はひとつも指摘していなかった。

[34] 康有為「日本変政考跋」、「康南海先生遺著彙刊」（十）、335 頁。康有為の変法の実施案は 6 カ条からなる。すなわち「群臣と共に誓って国事を定めること、制度局を立てて憲法を議定すること、草莽志士を登用して諮詢に備えること、君主の尊貴を下げて臣下平民の状況を理解すること、多くの留学生を派遣して新しい学問を学ばせること、暦法と服装を変えて人心を変えること」である（「康有為自編年譜」、「戊戌変法」四、140 頁）。

[35] 黄彰健「読康有為『日本変政考』」、「大陸雑誌」第 40 巻第 1 期、1－11 頁。

[36] 「復頌兄（汪詒年――引用者）書」、「長編」、100 頁。

[37] 『日本変政記』と『日本変政考』は、別の論著であるが、前者は簡略であり、戊戌三月八日（1898 年 3 月 29 日）に進呈したもの、後者は前者の進呈後、詔勅によって、さらに詳しく拡大編成し、評語を加えて、同年六月から七月にかけて分冊にして進呈したものである。

[38] 陳華新「康有為与『日本変政考』的幾個問題」、『論戊戌維新運動及康有為梁啓超』広東人民出版社、1985 年、274 頁。

[39] 大同訳書局は光緒 23 年（1897 年）秋に創設され、康有為の『孔子改制考』、『日本書目誌』などを刊行した。『日本書目誌』の「自序」で、康有為は執筆年月を記入していないため、書かれた時期は定かではない。とはいえ、梁啓超が光緒 23 年（1897 年 11 月 15 日）『時務報』に発表した「読『日本書目誌』後」という文章には、康有為の「自序」が引用されているため、康有為の「自序」はこれ以前に書かれたものと推察できる。「大同訳書局新出各書」の広告によると、「日本書目誌」は 1898 年に刊行された。

[40] 「日本書目誌」、『康有為全集』（3）上海古籍出版社、1992 年、739－776 頁。

[41] 「伊康問答」、『閩報』光緒 24 年 8 月。湯志鈞『戊戌変法人物伝稿』（中華書局、1980 年、641－642 頁）を参照。

[42] 「康南海自編年譜」、「戊戌変法」（三）、446－447 頁。
[43] 「春秋中国彝狄弁序」、「文集」第一集、135 頁。
[44] 「変法通議・論中国宜講求法律之学」、「文集」第一集、78 頁。
[45] 「記東侠」、「文集」第一集、125 頁。
[46] 「変法通議・論女学」、「文集」第一集、46 頁。
[47] 「日本国誌後序」、「文集」第一集、140 頁。
[48] 「読『日本書目誌』後」、「文集」第一集、156 頁。
[49] 「変法通議・論不変法之害」、「文集」第一集、46 頁。
[50] 同上。
[51] 同上。
[52] 「変法通議・論訳書」、「文集」第一集、61 頁。尼虚曼は、華族である。東京より 75 マイル離れた大名の上州省安中府に代々住み、該省君主の家臣であった。
[53] 「読『日本書目誌』後」、「文集」第一集、156 頁。
[54] 同上。
[55] 「読『日本書目誌』後」、「文集」第一集、157 頁。
[56] 「大同訳書局叙例」、「文集」第一集、147 頁。
[57] 同上。
[58] 「変法通議・論訳書」、「文集」第一集、67 頁。
[59] 張之洞「勧学篇・遊学」、『張之洞全集』（十二）、9738 頁。
[60] 同上。
[61] 梁啓超の日本に関する知識の源は、康有為のほか、黄遵憲の『日本国誌』である。また『日本』雑誌の編集者であった佐藤宏は『日本』、『日本人』などの雑誌を『時務報』新聞社及び黄遵憲、康有為等に贈呈し続けており（佐藤宏「致汪穰卿（汪康年）書」、『汪康年師友書札』（四）上海古籍出版社、1986 年、3326－3327 頁）、梁啓超は、それらの雑誌に目を通した可能性が高い。著者の管見のかぎりでは、来日前に梁啓超と交際していた日本人は多くなかった。たとえば梁啓超が文中で言及した日本人と言えば、古城貞吉と矢野龍渓くらいである。古城は当時『時務報』新聞社の招聘を受けて、日本語の翻訳者となり、日本からの情報の大部分を訳出した（光緒 22 年 7 月 21 日付『時務報』第三冊）。また北京で、梁啓超は矢野と、黄遵憲の『日本国誌』について議論したことがある（「新民説・論進歩」、「文集」第一集、581 頁）。
[62] たとえば、梁啓超の変法を主張する代表作「変法通議」（「文集」第一集、19、21、23、38、46、60、61 頁）で、日本が明治維新を通して、アジアの強国となったことを讃えた。
[63] 「変法通議・論学校」、「文集」第一集、42 頁。
[64] 「変法通議・論師範」、「文集」第一集、41 頁。
[65] 同上論文、「文集」第一集、42 頁。
[66] 同上。
[67] 「変法通議・論女学」、「文集」第一集、46 頁。
[68] 『日本書目誌』には、『民間経済録』と『国会之前途・治安小言・国会難局之由来・地租論』が収められているが、福沢諭吉の『文明論之概略』、『学問のすすめ』などは収められていない。梁啓超も一度も福沢諭吉の名前に触れていない。しかし、「論中国宜講法律之学」(1896 年)の中で、梁啓超が「文明観」を論じた際の一段落の文面は福沢の文明観と極めて似ており、この時期に、梁啓超は福沢の著書を読んだことがあるのかもしれない。福沢諭吉、中村正直、加藤弘之、中江兆民の著書、平田東助、平塚定二郎の共訳した『国家論』、高田早苗『政治学』、有賀長雄『国家学』などは、梁啓超が日本に亡命した後、はじめて彼の思想に影響を与えた。
[69] 「康南海先生伝」、「文集」第三集、1944－1945 頁。
[70] 宮崎滔天「東京だより」（1899 年 2 月 18 日付）、『宮崎滔天全集』第 5 巻、平凡社、昭和 51 年、240 頁。
[71] 1898 年大同印書局より刊行された。

[72] 1905 年、梁啓超は「飲氷室詩話」で康有為の「読日本松陰先生『幽室文稿』題其上」という詩を収めた（『飲氷室合集・文集』之四十五下、44－45 頁）。

[73] 旧暦 1898 年 9 月 20 日付「致品川弥二郎書」、「長編」、162－163 頁。

[74] 光緒 24 年 10 月 19 日付『申報』、「長編」、169－170 頁。

[75] 馮自由「亡命客之日本姓名」、『革命逸史』初集、台湾商務印書館、民国 54 年 10 月、3 頁。羅孝高は『任公軼事』で、康有為と梁啓超が名前を改めたことについて、次のように記している。「戊戌変法が失敗した後、わが党の日本に亡命した人々は、国内の監視を避けるために、往々にして日本名を名づけた。康南海（康有為――引用者）先生はかつて『榎木森』という名前があった。任公は吉田松陰の著書を読み、彼の人柄を敬慕するようになったため、「吉田晋」と自称した。彼は国内の親友と手紙のやり取りをしている時に、よくこの名前を使っていた。また彼の長女（梁）思順はまだ幼少であり、日本の小学校に入るために、吉田静子に改めた」（羅孝高「任公軼事」、「長編」、177 頁）。

[76] 梁啓勳「殊曼室戊辰筆記」、「長編」、36 頁。

[77] 「記東侠」、「文集」第一集、126 頁。

[78] 「湖南時務学堂課芸批」、「戊戌変法」（二）、549 頁。

[79] 狄楚青「任公（梁啓超）先生事略」、「長編」、87－88 頁。

[80] 梁啓超原著、小野和子訳『清代学術概論』平凡社、昭和 49 年、279 頁。

[81] 梁啓超原著、島田虔次訳「言論界における私の過去と将来」、『中国革命の先駆者たち』筑摩書房、1965 年、50 頁。

[82] 「長編」、91 頁。

[83] 同上書、308 頁。

[84] 明治 32(1899 年)年 7 月 15 日、「（梁啓超は）東京専門学校の卒業式に臨み居たりと」。『読売新聞』1899 年 7 月 17 日。

[85] 「飲氷室合集・文集」（四十五下）、2 頁。

[86] 「新民説・論私徳」、「文集」第一集、631 頁。